

「日本文学の越境 ― 非・日本語で Haiku を読む／詠む ―」報告

フカサワ シンジ
深沢 眞二

第39回の国際日本文学研究集会では、委員会において「文学の越境」をキーワードとしてシンポジウムが開けないかという提起があり、言語を越えて世界に広まっている日本の文学の一形式「Haiku」を取り上げるようになった。私は俳諧の研究者としてそのシンポジウムをコーディネートし司会進行する役を仰せつかり、委員会メンバーである相田満氏と相談しながら、次のようなお話をお願いできるパネラーを探すことになった。

1. 国際的な視点から「非・日本語のHaikuの現在」を話して下さる方。
2. 「Ezra Poundは日本文学（とくに俳句）をどう英語文化圏に伝えたか」を話して下さる方。
3. 英語によるHaikuの実作者・選者もしくは研究者。
4. 漢俳を含め、中国語圏での俳句の実作者・選者もしくは研究者。

そして、1. については、日本大学の教授で国際俳句交流協会理事・現代俳句協会国際部長の^{キムラトシオ}木村聡雄先生に依頼して御快諾を得た。2. については、日本エズラ・パウンド協会役員のFESSLER Michael（フェスラー・マイケル）先生に依頼してお引き受けいただいた。3. については、木村先生のご紹介によって、アメリカのModern Haiku出版社の編集者で、アメリカ俳句協会元会長のGURGA Lee（ガーガ・リー）先生に來日していただくことになった。4. については、和洋女子大学教授で台湾の俳句事情に詳しい^{トッパ タシゲナオ}鳥羽田重直先生にお引

き受けいただいた。

FESSLER 先生と GURGA 先生には英語によって発表していただいて逐次通訳を付けることになった。うかがうところによると、国文学研究資料館の国際日本文学研究集会において日本語以外での発表は初めてということで、通訳者の手配にあたって木村先生からのご紹介を得たことや、パネラー全員での打ち合わせの席で総合研究大学院大学の研究生・王雯璐^{wangwenlu}さんに通訳を務めていただいたことなど、準備段階で関係者多数のご協力にあずかったことに感謝申し上げます。また、「国際」と銘打ったこの研究集会では、日本の文学作品を翻訳のみによって読み研究している海外の研究者も増えていることから、今後、非・日本語による発表への対応も欠かせなくなってくると予想される。はからずも今回のシンポジウムはその先鞭を付けた形となった。

さて、シンポジウムの冒頭に私が基調報告としてお話ししたことは、要約すると次のような内容である。

かつて、スリランカから来た女子留学生から聞いたのだが、スリランカでは芭蕉の句「古池や蛙飛込む水の音」がよく知られていて、一般的に、「古池はこの世の中、社会の喩えである。蛙はお釈迦様の喩えである。お釈迦様が新たな教えを広めようとしたが、当時の社会はそれをなかなか受け入れなかった。それでお釈迦様は蛙が古池に飛び込むようにして社会に飛び込み、説法をおこなった。人々は徐々に仏教を理解し、受け入れるようになっていった。蛙が水に飛び込む時には音がしたが、やがて静かな池に戻ったのである。」

と解釈されているという。私は、芭蕉がスリランカでもよく知られていることに驚き、「古池」句が釈迦の説法に結びつけられているということを面白いと思った。そもそも俳句はその短さゆえに象徴性を付与されやすい形式であり、アフォリズム（警句・箴言）に類する詩として言語や国境を越えていく力があるということを思った。俳句は、すでに日本だけの文芸ではない。日本語を使っている場合も少なくないが、それ以上に、世界中の言語によってそれぞれの言語の型に合わせて詠まれて（創作されて）いる。それなのに日本の俳句実作者

は、世界的な俳句の広がりをおそらく知らない。また、創作の広まりと並行して、スリランカの「古池」句がそうであるように、芭蕉をはじめ日本の古典句がそれぞれの言語圏で独自の解釈をもって読まれて（理解されて）いる。それなのに私自身を含め日本の研究者の多くは、古典句が日本以外でどのように受け止められているかを知らない。現状では、世界の Haiku から日本は孤立しかねない。いま、日本以外で、俳句がどのように〈詠まれて／読まれて〉いるかを もっと 知ろうという考えからこのシンポジウムを企画した。

続いて、4人のパネラーが登壇して報告をおこなった。以下に、順を追ってそれぞれの内容を要約する。枠で囲んだ紹介文は、当日会場に配布された要旨の冊子（Abstracts）に載ったご本人の文である。また、各要約は当日の配付資料と録音をもとに私がまとめ直したものであり、FESSLER 先生と GURGA 先生のお話については通訳を介してのものであることをおことわりしておく。

1. 「非・日本語による Haiku の現在」 木村聡雄先生

木村 聡雄（キムラ・トシオ）

1956年、東京生まれ。日本大学教授（英文学／比較文学）、ロンドン大学元学術研究員、国際俳句交流協会理事、現代俳句協会国際部長、日本PENクラブ会員ほか。
〔著書・共著〕

『日英対訳 21 世紀俳句の時空』、『ハイク』（フランス・ガリマール）、『丸善イギリス文化事典』、『ロンドンを旅する60章』、『英米文学にみる仮想と現実』、『彼方』、『いばら姫』ほか、俳句アンソロジー多数。

〔講演、シンポジウム〕

アメリカ俳句協会大会講演（シカゴ／エバンストン）、アメリカ文学協会俳句シンポジウム（ボストン）、印日文学祭俳句講演（駐日インド大使館）、国際PEN俳句シンポジウム企画・司会、ファンロンパイ EU 大統領俳句講演企画・司会（ブリュッセル）ほか。

〔選考委員ほか〕

日欧英語俳句コンテスト選考委員（外務省・駐日 EU 代表部）、ジャパントイムズ・週刊 ST 高校英語俳句大会選考委員、JAL 世界こども俳句翻訳委員、NHK ワールド英語俳句番組企画、映画「ほかいびと ― 伊那の井月」俳句英訳、国際俳句交流協会外国語俳句選考委員、現代俳句協会俳句大会選考委員ほか。

ベルギー前首相で欧州理事会議長のファン・ロンパイ氏が一昨年来日した時、「山々のあまり明暗に俳句満つ」（木村訳）ほかの句を詠んだ。21世紀、俳句は日本の伝統詩型から大きく羽ばたき、多くの国々でその母国語を以て書かれている。

「非・日本語俳句」という時、もともと日本語で書かれた俳句を外国語訳したものと、はじめから日本語以外で書かれ Haiku と呼ばれている詩の一種に分けられる。前者が読まれたのち、後者が書かれる（詠まれる）ようになった。

19世紀末、子規の俳句革新と前後して、日本の俳句は海外に伝えられた。イギリスの外交官であった Aston の『日本文学史』（1893）が、芭蕉を中心として17世紀の俳諧の発句を紹介したのが始まりである。1913年には Ezra Pound が俳句的な詩「IN A STATION OF THE METRO（地下鉄の駅で）」を発表し、俳句が欧米の詩人たちに興味を持たれるきっかけとなった。

The apparition of these faces in the crowd;

Petals on a wet, black bough.

「群衆の中、これらの顔の出現。／濡れた黒い枝に花びら。」

これが、Haiku が読むだけでなく書くものとなった象徴的な実例となったことは重要である。だが、一般人に俳句への興味が爆発的にあらわれて書かれるようになったのは、20世紀のなかば、学習院大学などで英語を教えていた Blyth が『Haiku』（1949）という本で俳句と「禅」を結びつけたことである。それはいわば直感的な解釈の「越境」であったが、そのことがついに欧米の人々に俳句を「発見」させることにつながった。20世紀後半からは、母国語による俳句の創作が世界に広まった。とくに Kerouac ら Beat 詩人たちが禅や俳句に関心を持ち俳句を書いた。そして、日本の奇跡的な復活やベトナム戦争を通じた東洋への関心とも相まって、俳句作者が爆発的に増えた。1968年アメリカ俳句協会が設立された。

（以下、現代の状況を、アメリカ・ヨーロッパ諸国・アフリカ・中南米・中国・モンゴル・フィリピン・インド・ネパールの Haiku 作品を紹介して説明。）

2. 「パウンドの方法論」 FESSLER Michael 先生

FESSLER Michael(フェスラー・マイケル)

I have been a poet for fifty years. Originally I wrote exclusively in western forms; I started writing haiku after coming to Japan. I also write 'haikufiction.' That is, short stories about haiku poets and haiku groups. In recent years I have been studying Japanese tanka as well as tanka in English.

My fiction and poetry have appeared in many periodicals and magazines, among them *Harvard Review*, *QLRS*, *Poetry East*, *Atlanta Review*, *Kyoto Journal*, and *The Iowa Review*. I am also represented in various anthologies, such as, *The Broken Bridge: Fiction from Expatriates in Literary Japan* (Stone Bridge), *Baseball Haiku*(W.W. Norton), *The Red Moon Anthologies of English Language Haiku*(RMP), *Haiku in English: The First Hundred Years* (W.W. Norton), and *Haiku 2015* (Modern Haiku Press). I have published a collection of haiku, *The Sweet Potato Sutra* (Bottle Rockets Press) and a textbook, *Design and Discuss* (Nan'un-do).

今日は、Ezra Pound、英語俳句、それに俳句実作者としての私の人生をお話しする。

私は詩を書き始めて50年、来日してから英語でHaikuを嗜むようになった。だが、友人たちに知らせない「隠れHaiku詩人」だった。なぜなら、日本人は日本語以外で書かれた俳句に猜疑心を持つと感じたからだ。英語でHaikuを書くのはおしゃれだけれど「なんちゃってだよ」という感じがあった。アメリカでも、Haikuが詩の世界で真剣に論じられることはなく、サブ・カテゴリー的なジャンルだった。また、英語のHaikuは表現方法にしても奇妙な印象のものばかりで、実を言えば、はじめなかった。私は我流でHaikuを作っていた。

伝統的形式の詩の「作り手」であり伝統的形式の「崩し屋」でもある Ezra Poundは、生活の全てを詩に捧げていた一方、反ユダヤ主義のファシストでもあった。詩の新しい方法を常に模索しており、表現において「切除する」ことを好んだ。彼の詩は俳句的要素を持っている。Haiku作者として彼を有名にした「地下鉄の駅で」は、パリのコンコルド駅で群衆のたくさんの顔に遭遇した鮮烈な経験から生まれ、はじめは30行、次に15行でその印象を書いたが廃棄、

その後「発句的な詩」として発表された。彼はこの作品が日本的な伝統を踏んでいることを認めている。これはとてもきれいにかっこよく切れている詩で、感情をするっと通り越していかない。名詞だけで勝負しているのにとっても自然な感じがする優れた詩である。「崩し屋」として革新的な詩の作り方をしており、イマジズム運動の代表作となった。また、切れた二つの部分から成る斬新な構成で比喩表現を用いない。そのことを彼は「重ね合わせの形式」と呼んでいる。これは、日本の俳句の「切れ」を使ったのであり、西洋的な形式に別れを告げたことを意味している。

1990年ごろからの私の Haiku、

cherry blossoms	桜の花。
against a gray sky	灰色の空を背景に
white gymnasium	白い体育館。

では、体育館を登場させることでロマンチックな感情を打ち消したかった。

the circumnutation	旋回する
of morning glories	朝顔。
memories of linoleum	リノリウムの思い出。

も、詩的に走りすぎる部分をリノリウムで打ち消している。これらは現代の英語 Haiku らしさのある作品だ。時代の要請に応じて、2013年には「エスカレーター Haiku」を発表している。そこでは「秋葉原」「デジタル句」を取り上げ、ホログラムのような印象を与える double-take を狙った1行詩もある。

「Haiku らしさ」は識別できるけれど解説できないものであり、いかなる言語にも存在するもの。Ezra Pound は「アーティストは常に前進しなければならない。読み手を退屈させないように生きること、そして、自分が見たことを見たまに書き記すことが使命なのだ。」と言っている。よい俳句を読むと、自分も俳句を詠みたくなる、それがよい俳句の条件なのだ。

3. 「日本の俳句の現代の英語俳句」 GURGA Lee 先生

GURGA Lee (ガーガ・リー)

Dr. Lee Gurga is a past-president of the Haiku Society of America and former editor of the journal Modern Haiku. He is currently editor of Modern Haiku Press. His two books of haiku, *Fresh Scent* and *In and Out of Fog* that were awarded “First Prize” in the Haiku Society of America Book Awards; his haiku-writing guide, *Haiku: A Poet’s Guide* was recognized by the Haiku Society of America as the “Best Book of Criticism” for 2004. He has been the recipient of an Illinois Arts Council Poetry Fellowship, the Japan-America Society of Chicago’s Cultural Achievement Award, and an American Red Cross Healthcare Heroes Award. He practices dentistry in the farming community of Lincoln, Illinois, USA.

Blyth は俳句を「世界文化に対する日本の比類なき贈り物」と称した。本日は俳句がどのように英語圏において支持されるようになったかをお話します。

今日、芭蕉や俳句は欧米で広く親しまれている。TV シリーズの「ザ・シンブソング」は視聴者が BASHO の名を知っていることを期待しているし、英訳された芭蕉俳句は数多く、毎年訳も増えており、高い評価を得ている。Blyth が俳句を禅と結びつけて以来俳句は東洋の精神的な「道」の一部と見なされており、環境問題に関係する人は俳句が人と世界の「調和」を表していると見る。詩人としての Haiku 作者は、多少なりとも日本の美学について意識があり、その中身 (content) を以て俳句が固有のものになると理解している。

英語に翻訳されている日本の俳句は、芭蕉から子規までの classical 俳句である。テキストとしては Robert Hass による『THE ESSENTIAL HAIKU』(1994) が一般的で、大学の標準的な教科書となっている。芭蕉についての本は最近も 2013 年、2014 年に出ている。(画像で主要な俳句の英訳書を紹介。その中で野口米次郎が初めて英語で俳句を詠んだことに触れる。)

欧米の詩人にとっての Haiku の評価基準は何か。Haiku は、17 シラブル以下の短い詩であり、自然を投影し、「切れ」を含み、イメージの並列を基本的な技巧とするもの、そして Haiku Moment と呼ばれる瞬間を捉えるものと認識されている。侘び・寂び・軽み・渋みも理解されている。ハルオ・シラネの『夢の

痕跡』(1998)、川本皓嗣『日本の詩歌について』(2000)、Richard Gilbert『意識の詩』(2008)、それに複数のアンソロジーや、俳句雑誌、さらに最近ではオンラインの情報によって理解は深化している。ハルオ・シラネは2000年に Modern Haiku 誌上に発表した論文で、Haiku は即吟写生でなければならないという神話を崩した。また、Richard Gilbert は2004年に同誌に発表した論文で、イメージの分離こそが俳句の技巧であり、人の心に対する Haiku の効果こそ一次的なもので、その背景や技法は二次的なものであると主張した。Gilbert は現代の英語 Haiku にとって切れと間がいかに重要であることを強調している。

私から見て、現代の英語 Haiku に重要な要素は、まず、外的と内的、二つの Form (形)。二つめが、季節を表すイメージと、抽象的なイメージ。次が、並列と分離。最後が、コントラストとパラドックス。

第一の Form (形) について言えば、外的には、現代 Haiku は17シラブルよりもさらに短くなっている。

summer clouds	夏の雲。
I pull the rope ladder up	縄ばしごを引っ張る
behind me	私の後ろに。

Susan Antolin

これは断片とフレーズで構成されており、3行の中のそれらの組み合わせがこの Haiku の内的な形と言える。この句では1行めの後に切れがあり、そこで断片とフレーズが分かれている。その結果生じる文法的な不完全性によりイメージの並列ができています。そのようなイメージの並列こそが英語 Haiku の目印なのである。

第二の、季節を表すイメージと抽象的なイメージは、初期の英語 Haiku 以来の特徴である。今では、抽象的なイメージと具体的なイメージのバランスが取られる傾向がある。(例句を二句、紹介。)

第三の、並列とは、一つの Haiku の中で二つのイメージが並列していることを指す。現代の Haiku ではこの並列が、単一イメージの中に複数の感覚を組み

合わせたり、近似イメージを重ね合わせることで認知のシフトを起こさせたり、整合性を取りながら躍動感を持たせたりと、Gilbertが「認知の分離」と呼んだような意外性をもっておこなわれる。(例句と、第四の要素については省略。)

現在の英語 Haiku には伝統派と進歩派があって、後者は前者をさげすむ態度を取りがちだが、今後、欧米における Haiku の詠み方も、Haiku に対する立ち位置によって多様化して行くだらう。私は、新しい潮流を好奇心と喜びをもって見守り、意外な場所で Haiku が擡頭することを期待している。

4. 「台湾の俳句事情」 鳥羽田重直先生

鳥羽田 重直 (トッパタ・シゲナオ)

和洋女子大学教授。中国古典文学専攻。

俳句関係：1979年、俳誌『沖』入会。能村登四郎に師事。1986年、『沖』同人。1998年、茨城県俳句作家協会新人賞。1999年、俳誌『天頂』（主宰波戸岡旭）創刊に参加。2000年、『天頂』同人。2007年、台北俳句会入会。俳人協会会員。茨城県俳句作家協会会員。台北俳句会会員。全日本漢詩連盟会員。句集『蘇州行』。

台湾の俳句の歴史は大きく二期に分けられる。第一期は1895～1945の日本統治時代。第二期は1970から現在まで。途中空白の時期はあるものの、95年という長い歴史を有している。第一期はさらに明治期（「日本派俳句」の時代）、大正期（「碧派・新傾向俳句」の時代）、昭和期（「ホトトギス・ゆうかり」の時代）の三期に分けることができる。大正末から昭和にかけて、俳誌『ゆうかり』（1921～1945）があった。第二期の最初の年1970は、現在まで続いている「台北俳句会」が黄靈芝^{ヨウレイシ}氏によって結成された年である。翌1971年には合同句集『台北俳句集』第1集を刊行、以後ほぼ年一回のペースで、2015・7には第43集が刊行された。毎月の句会（全員日本語で話す）は、会員は事前に黄靈芝氏宛に作品を送付、黄氏が句稿を作成、句会当日出席者全員が互選をし、その結果を後日黄氏が講評を付けて会員に配布する方法がとられてきたが、黄氏が体調を崩され、2013・1からは句稿作成の担当が杜青春氏に代わった。2015・6から5回

の句会記録を紹介する。(ここでは資料に載った20句から高得点句を抜粋する。)

短夜やなほ読み終へぬ戦中記	北条千鶴子
休耕の田畦太らせ夏の草	廖運藩
夏草や石牌に台湾開拓史(芝山巖)	劉竹村
水牛の家路知つたる歩みかな	三宅節子

北条さんは台湾在住の日本人。台湾人の方もいるし、台湾原住民の方もいる。

^{キヤムラア}鹹蝟(蜆の醤油浸し)・水牛・^{チウオンツエー}樹王祭(神木を参拝祈願する)・^{カウカンホン}九降風(陰曆九月頃の新竹地方の風)など、台湾独特のいわゆる台湾季語が、黄靈芝氏の『台湾俳句歳時記』に載っている。なお、台湾には台北俳句会のほかに、小規模ではあるが「春燈台北句会」がある。加藤敬一氏により1980に創始され、今も台湾在住の春燈会員を中心に毎月句会が行われている。また、台湾国内の日語科の学生を対象とした全国日本語俳句大会が2010以来6回催されており、大会の結果をまとめた雑誌『ゆうかりふたす』が刊行されている。

入選作品の一部を紹介する。(資料から抜粋。)

題詠	山眠る今日も返事を待ちながら	古若璇(文化大學)
	山眠るそろそろ起きて笑ってよ	楊晴(銘傳大学)
	立春や老友二人蕎麦啜る	辛佩憶(文化大學)
雑詠	眼を開けてぐっすり眠る熱帯魚	郭育如(義守大学)
	ぶらんこに一つ一つの笑い顔	陳詠謙(南台科技大学)

2012年には、日本及び台湾の台北俳句会会員の有志が相計り・台湾学生俳句育成会を立ち上げた。

さて、台北俳句会の会員の中から連句をやろうとの話が持ち上がり、有志ですでに五回歌仙を巻き、現在六回目が進行中である。また、中国の文人・学者たちと日本の俳人たちの交流の中から生れた「漢俳」は、漢字五字・七字・五字から成る漢詩の新詩型。1980に日本の俳人訪中団の歓迎の席で、当時の仏教協会会長・趙樸初氏が作ったのが最初である。2005・3には劉徳有氏を会長とする漢俳学会が創設され、2013には、『中国漢俳百家詩選』が刊行されている。

現在、台北俳句会の、20数人はいると思われる台湾人の会員は、嘗て日本統治時代に日本の教育を受けた日本語世代の人たち（日本語人）である。その人たちはすでに90歳前後となった。若い人たちをいかにして育てていくかが大きな課題になっており、学生日語俳句大会の果す役割は大きい。

4人のパネラーの報告に引き続き、ディスカッションに入った。進行をスムーズにするために、前日の打ち合わせにおいて共通の質問を二つ、投げかけてあって、それに順番に答えていただいた。第一の質問は、「非・日本語圏において、Haikuはどう定義されるか。」であった。

- 木村先生 「言語が違くと、五・七・五の定型はありえず、free wordsの形を取っている。主流は3行の自由詩。歳時記もありえない。むしろ自然詩というべきで、無季も認めるべきだ。将来は世界的な定義が必要だろう。」
- FESSLER先生 「簡潔で季節性があって洞察力がみなぎっている詩。俳句らしさ haiku-ness がある。よい句を見るとそれが分かる。Haiku を作ることでいろいろな意味があふれ出てくる、源泉のようなもの。」
- GURGA先生 「先ほどの発表にあったように、①短いこと、②自然または季節を表すイメージ、③文法的にあえて不完全にして切れが入ること、④ある一つの瞬間の出来事だけを表すこと。さらに重要なのは haiku-ness。長谷川権氏によれば、それは、間が入ること。認知に空間が入ること。この点は欧米でも模索中。」
- 鳥羽田先生 「私は有季定型で俳句を作り続けてきた。今日は、俳句に関する考えに大きな衝撃を受けた。台湾でも日本語によって俳句を作り、日本人とかわらない。ただ、『台湾俳句歳時記』は日本の歳時記とは異質で、日本の季語とはほとんど重ならない。」

第二の質問は「芭蕉をはじめ、日本の古典俳句の魅力は何か。」であった。

- 木村先生 「芭蕉はすでに世界的なアイコン。21世紀、いちばんよく知られている日本人かもしれない。全ての文学的魅力を兼ね備えた人物。かつての欧

米における Japonism の流れで日本的なものがなお魅力を持っていて、その入口に芭蕉がいる。『名月や池をめぐりてよもすがら』は、西洋人には目的のないナンセンスな行動、ないし、禪的修行と見え、驚きを以て迎えられた。」

- **FESSLER 先生** 「たとえば芭蕉の『夕風や水青鷺の脛を打つ』、西洋人には発想できない、二つの部分（夕風・水）の関連のない置き方だ。そこに魅力を感じる。あるいは、『いなづまに悟らぬ人の貴さよ』、とても俳諧の持つユーモアを感じて好きなのだが説明できない。」
- **GURGA 先生** 「俳句と言えば芭蕉であり、シェイクスピアに比肩できる。ただ、芭蕉の場合、児童書などで『古池や』句が盛んにパロディにされる。『枯枝に鳥のとまりけり秋の暮』も本歌取りのようにして Haiku に使われている。」
- **鳥羽田先生** 「私は、名を残している俳人の方々の作句態度に惹かれる。『作り手であると同時に崩し屋』であることは重要だ。俳人の能村登四郎先生は句集に対する批判を真摯に受け止めてその次の句集に生かした。私は間もなく第一句集を出すというところだが、能村先生を見習いたい。」

以上のように、質問に対するパネラーの答えが二巡した時点で、すでに予定の時刻を20分超過していた。まことに残念ながら、当日フリーに意見を交換する余裕はなかった。司会進行の拙さをお詫びするばかりである。

ただ、二つの質問に対するパネラーの方々のお答えからは、俳句が Haiku として世界に広く迎え入れられている理由が、見えてくるように思われた。私なりの理解をまとめてみると、一つには極端に短い詩型によって大きなイメージを生み出す装置であること、一つにはパロディやオマージュとして多数作者に次々に引き継がれて行くモデルとしての古典を持っていること、ではないだろうか。また、できれば、発言の中にあつた「haiku-ness」（日本語としては「俳味」があてはまるか）をさらに掘り下げたかったと思う。

パネラーの4人の先生は皆、俳句ないし Haiku の実作者であり、それについて語る様子が実に愉しげであったことが、とても印象深い。最後にもう一度、シンポジウムへのご参加に感謝を申し上げます。ありがとうございました。